第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

中道東山西山遺跡が所在する琴浦町は、平成16年９月１日に旧東伯町と旧赤碕町が合併して誕生した、新しい町である。この町名は、かつてこの地域の海岸一帯が「琴ノ浦」と呼ばれていたことに由来する。当町は鳥取県中部、東伯郡の西側を占める位置にあり、町域は、大山連峰の烏ヶ山（1381m）から船上山（615m）を結ぶ線を南西端とし、北東に細長い三角状に広がって北端は日本海に至る。東西15.2㎞、南北18.5㎞、総面積は139.88㎢を測り、人口は約20,500人（平成16年末）である。

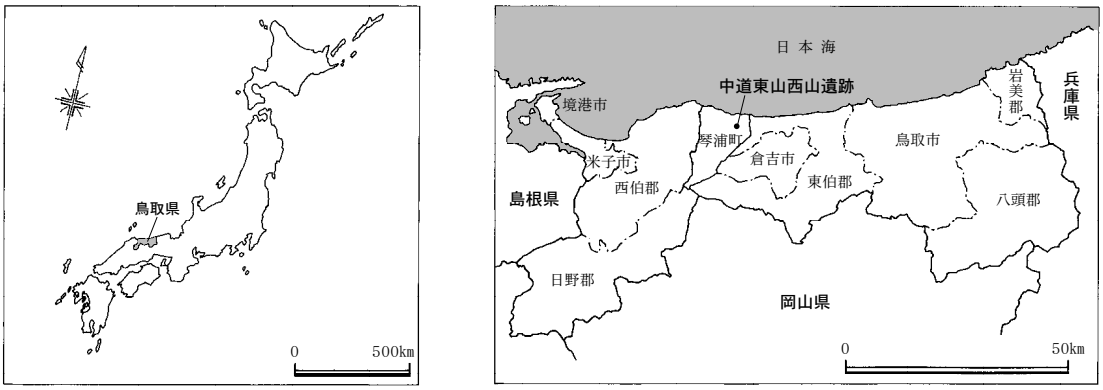
本町の地勢は、大山（1729m）山系から手指状に派生する急峻な丘陵地、加勢蛇川・洗川及び勝田川・黒川流域に発達した平野部からなる。平野部は、肥沃な黒ボク地帯で細かな起伏が認められる。丘陵地は、火山灰土の堆積した溶岩台地状地形が海岸線付近まで延びている。町内には、前述の大山山麓に源流を発する河川の他、大小計８本の川が日本海に注いでいる。

当町の北側は、国道９号線沿線で弱電、酒造、食品製造などの商工業群が形成されている。特に、八橋地区は、古代から伯耆の東西をつなぐ交通、交流及び戦略的活動の要衝として栄え、古代山陰道の清水駅、中世以降は八橋城が築かれた場所でもある。赤碕港は、主に沿岸漁業が盛んである。町中部域は、県下有数の生産、販売高を誇る農業が盛んで、丘陵上では昭和20年代から二十世紀梨栽培が行われ、北米や香港・シンガポールなどにも輸出されるなど本県湯梨浜町に次ぐ生産量を誇るが、現在では農家の高齢化、後継者不足による廃園が目立つようになった。また、平野部においては水稲とともにかつては国内でも有数の芝栽培の他、ブロイラー、乳牛、和牛などの畜産も盛んに行われている。町域南側は、国立公園の一部の大山滝、伯耆大シイ、船上山などが知られ、風光明媚な自然・景勝地を求めて観光客が訪れる地域となっている。

町内の遺跡は、加勢蛇川下流域右岸の低丘陵地と、加勢蛇・洗川左岸の丘陵台地とその山裾付近、勝田川流域及び黒川左岸丘陵上に集まっている。加勢蛇・洗川両河川に挟まれた平野部には律令時代の条里制の名残が旧地名や地割りに残る地域もあるが、概ね残りがよいとは言えない。

中道東山西山遺跡は、ＪＲ八橋駅の東南1.6㎞の標高約70m、東側水田面からの比高差約40mの丘陵上に立地している。丘陵を開析する東西の小河川は遺跡から約500m北で合流し茅町川となって日本海に注ぐ。遺跡から日本海まで２㎞余である。調査地後背には大山が、眼前には広く日本海が望め、快晴日には隠岐諸島を見ることもできる。

（牧本・小口）



第２図　琴浦町位置図

第２節　歴史的環境

旧石器・縄文時代　鳥取県内では旧石器時代の遺構を伴う遺跡は発見されていない。当町でも松ヶ丘、槻下で尖頭器が数点、三林遺跡（６）でサイドスクレーパー、笠見第３遺跡（７）で舟底形細石刃石核が見つかっているが、層位的にはいずれも確認されていない。

縄文時代の遺構は、後期に入るまで明確なものは少ない。早～前期では大栄町西高尾谷奥遺跡（41）で押型文土器とともに住居跡の可能性がある竪穴状遺構、松ヶ丘遺跡（58）、森藤第１・２遺跡（39）、上伊勢第１遺跡（２）などで土器片が出土している。中期では、井図地中ソネ遺跡（５）、井図地頭遺跡（４）など丘陵上の遺跡で、土器が出土している。後期になると丘陵部に定住的な集落が見られるようになる。特に森藤第２遺跡では中央に石囲炉をもつ竪穴住居が精製・粗製土器、土器片錘、土偶とともに検出されている。また、勝田川左岸の南原千軒遺跡（19）では、中津式併行期の竪穴住居跡の他、今朝平タイプに類似した土偶が出土している。その他、この時代と考えられる落し穴が福留遺跡（17）、化粧川遺跡（16）、笠見第３遺跡、中尾第１遺跡（１）など多数の遺跡で検出されており、狩猟場として丘陵・微高地が利用された様子が窺われる。

弥生時代　弥生時代に入り本格的に稲作が始まると、それを機軸とした社会が形成される。前期に米子市目久美遺跡で水田が確認されているが、県中部では、当該期の稲作関連遺構は発見されていない。前期の集落も見つかっていないが、上伊勢第１遺跡、三保第１遺跡（３）、井図地頭遺跡などで土器が出土している。中尾第１遺跡では、前期後葉の配石墓・土壙墓が集中している他、三保第１遺跡でも集石遺構が見つかっている。中期の遺跡は、中尾第１遺跡、上伊勢第１遺跡で竪穴住居が検出されている他、墓ノ上遺跡（67）、別所女夫岩峯遺跡（63）で木棺墓が検出されている程度である。

中期後葉から古墳時代初頭にかけて、丘陵上を中心に集落遺跡が大幅に増加する。森藤第１・２遺跡、水溜り・駕籠据場遺跡（30）、大峰遺跡（40）、井図地中ソネ遺跡、三保遺跡（51）、笠見第３遺跡、三林遺跡、中道東山西山遺跡（８）、久蔵峰北遺跡（10）、福留遺跡などがある。これらの遺跡の中には、集落内に玉作り工房を持つ遺跡がある。大栄町西高江遺跡は、中期の工房跡で水晶の剥片とともに鉄製工具等が出土している。笠見第３遺跡、久蔵峰北遺跡は、後期の工房跡で碧玉・緑色凝灰岩製の管玉未製品や剥片が多数出土しており、製作にあたっては鉄器が使用されている。

湯坂遺跡（20）では、小型の墳丘墓が築造されている他、井図地中ソネ遺跡では、弥生時代終末から古墳時代初頭の溝で区画された土壙墓群が見つかっている。

また、弥生時代の祭祀に特徴的な銅鐸が、県中部では６遺跡で計７口見つかっている。当該地域では、八橋南方丘陵上（58）で銅鐸（扁平鈕Ⅰ式）が１口見つかっている。また、田越南方丘陵上（53）では、出土状況は明らかではないが、箱式石棺の下から中細形銅剣が４口、久蔵峰（59）で銅矛が１口出土している。八橋地区を中心とする地域は、銅剣・銅矛・銅鐸がそろって出土しており、島根県神庭荒神谷遺跡と同様の組成であることから、共通した祭祀形態があったものとして興味深い。

古墳時代　古墳時代に入ると大型前方後円墳が各地に出現する。当該地域では明らかに前期に属する大型古墳は確認されていないが、前方後方墳である別所１号墳（笠取塚古墳）（65）は、撥型に開く前方部等の特徴から前期に遡る可能性がある。中期から後期になって前方後円墳が築造され、八橋狐塚古墳（62）、笠見１号墳（55）、竜ヶ崎３号墳（50）がある。

中期・後期になると中・小規模の円墳が群集して築かれるようになり、大高野古墳群（32）、塚本

古墳群（33)、斎尾古墳群（34)、公文古墳群（47)、竜ヶ崎古墳群、別所古墳群（66)、箆津古墳群（76)、坂ノ上古墳群（75)、梅田古墳群（74）などがある。また、後期以降、従来の竪穴系の埋葬施設に代わって横穴式石室が採用される。このうち、大法３号墳（43）や三保６号墳（52)、大栄町上種東３、上種西14号墳は竪穴系横口式石室と呼ばれる特異な構造で、八橋狐塚古墳のくびれ部西側の石室もその可能性がある。槻下古墳群（28)、塚本古墳群、大高野古墳群、斎尾古墳群など後続する石室形態も同じ系譜上のものであることから、加勢蛇川流域が石室形態を共通とするまとまった地域であったことを示している。大高野３号墳では金銅製耳環・青銅製鈴・鉄刀・刀子などが、槻下５号墳（代々１号墳）では金環・鉄刀などが副葬されていた。山田１号墳（48）や出上岩屋古墳（69）は切石積石室で、終末期の様相を示す。

この時代の集落は、丘陵上に営まれる三保遺跡、井図地中ソネ遺跡、笠見第３遺跡、八橋第８・９遺跡（13)、松谷中峰遺跡（15)、別所中峯遺跡（14）などの他、低地部分でも小規模ながら中尾第１遺跡、上伊勢第１遺跡、三保第１遺跡、逢束第２遺跡（26）等がある。

古代　日本で最初に仏教寺院が建立されてから約半世紀後の７世紀後半以降、山陰地方で仏教文化受容の痕跡が認められる。現在県内では22ヵ所の古代寺院が見つかっているが、初期の仏教文化の姿を最もよく残し、山陰では唯一の国特別史跡に指定されている斎尾廃寺（36）は、県内の古代寺院の多くが法起寺式伽藍配置を採用するのに対し、法隆寺式を採っている。塑像片・仏頭・鴟尾・鬼瓦の他、創建期の軒丸瓦には紀寺式、軒平瓦に法隆寺式系統のものが出土し、山陰・山陽では数少ない瓦当文様をもち、畿内と結びつきの深い有力豪族が斎尾廃寺周辺で勢力を持っていたと推察される。大高野遺跡（31）では、総柱礎石建物群が検出されており、正倉（郷倉）と考えられ、郡衙推定地もその周辺に比定されている。その周辺の伊勢野遺跡（37)、水溜り・駕籠据場遺跡、森藤遺跡群では、掘立柱建物を中心とする集落が見つかっている他、大法に古瓦出土地（42）がある。加勢蛇川下流右岸域は、伯耆国八橋郡に属し、当郡の中心地であったと推察される。その他、旧箆津郷に当る八幡遺跡（18）では、掘立柱建物、赤色塗彩土師器が多数出土している。

平安時代では、上伊勢第１遺跡で、規格性のある大規模な畠跡がみつかっている他、丘陵上の中道東山西山遺跡では小規模な鍛冶施設が検出されており、当時の農耕、集落内鉄器生産の様相を窺うことができる。笠見第３遺跡、三林遺跡では、専用器を用いた火葬墓が検出されている他、当該期末になると末法思想が広まり、金屋（38）と法万（44）でも経塚が作られ、金屋では銅経筒が出土している。

中世　律令体制の崩壊とともに封建制社会が形成される。南原千軒遺跡では、大規模な溝内から大量の鉄滓が出土している他、整然と並ぶ掘立柱建物や和鏡を副葬した墓壙が検出されている。井図地頭遺跡では、平安時代末頃の「コ」字状の方形区画溝があり、丘陵上の方形居館の可能性が指摘されている。また、『伯耆民談記』に「岩野弾正坊居す」と記された、槻下館跡（27）がある。台地に堀を巡らせた方形の一段高い敷地が並んで残り、一つには周囲に高さ２ｍの土塁が築かれている。その他、町域西側海岸部から船上山にかけて、鎌倉末期と推定される、宝塔と宝篋印塔の二様式を合わせ持つ独特の形態の「赤碕塔」が、６基確認されている。

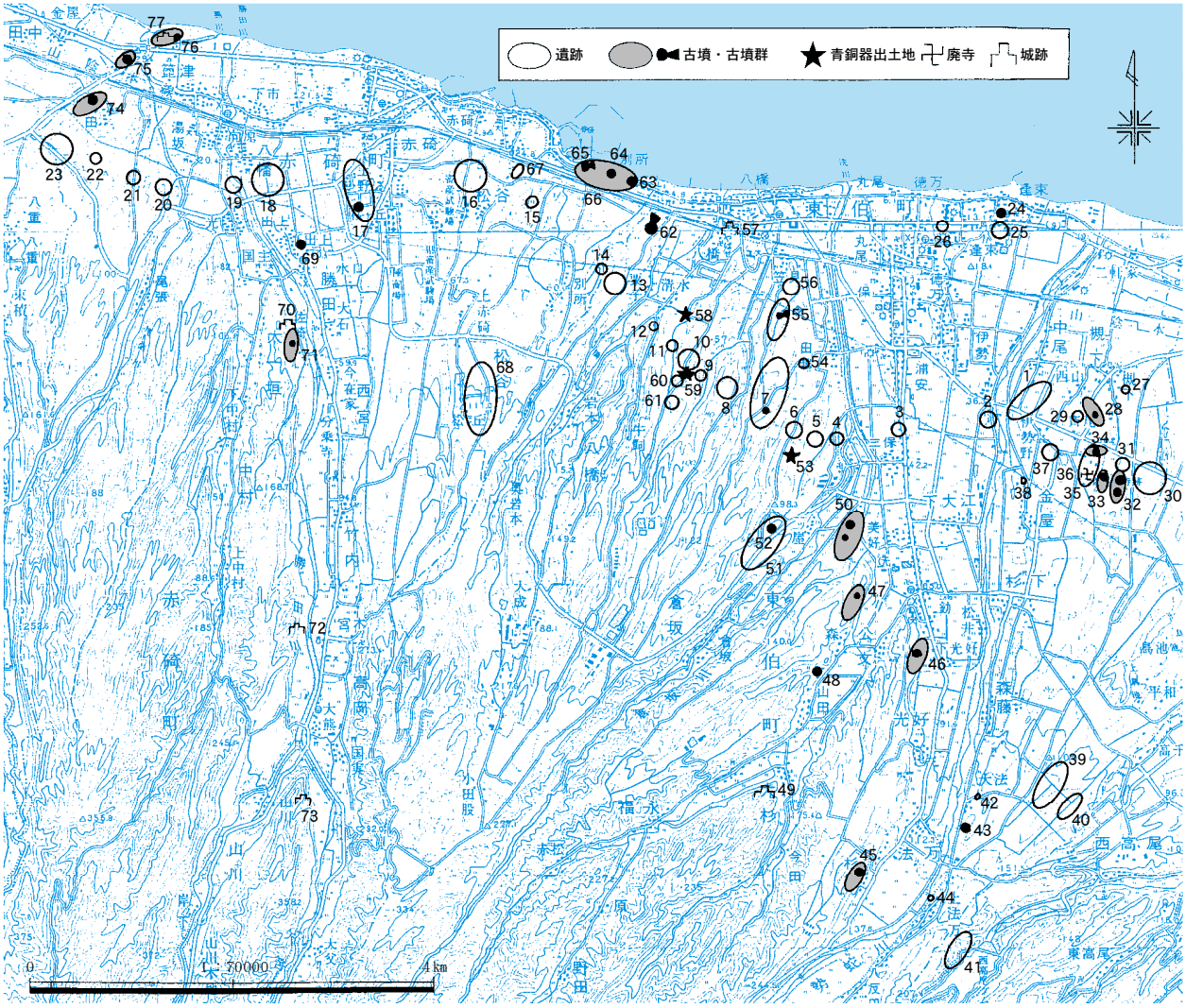
船上山には、鎌倉時代末の戦乱期に、後醍醐天皇が隠岐島から逃れる際に立て籠もった国史跡行宮跡がある。その他中世城館が各地に見られ、南北朝時代には、行松氏によって築造されのちに尼子・毛利氏の支配下となり、伯耆方面の経営拠点となった八橋城跡がある。また大杉には南条氏の出城で

ある妙見山城跡（49）、箆津には、土塁と堀を持つ箆津城（槇城）（77）がある。1585年頃の築城と推定され、海上防備の城と考えられている。他に、太一垣城（70）、大仏山城（72）、山川城跡（73）などがあり、『伯耆民談記』によると、吉川元春の羽衣石城攻撃に関与した城と考えられている。

近世　江戸時代前期、寛永14年（1637年）の『因幡伯耆駄賃銀宿賃書付』に「大塚」の文字がみられることから、逢束はこの時期には宿駅として機能していたことが分かる。またこの地には鳥取藩の藩倉「大塚御蔵」がおかれ、現在でも北側の土手の一部と火除地が残っている。　（牧本）

【参考文献】
赤碕町編　1974『赤碕町誌』
東伯町編　1968『東伯町誌』
鳥取県教育委員会　2003『弥生時代からのメッセージ』鳥取県教育委員会
鳥取県埋蔵文化財センター　1989『歴史時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財センター
内藤正中・真田廣幸・日置粂左ヱ門著　1997『県史31　鳥取県の歴史』（株）山川出版社
坂詰秀一編　2003『仏教考古学辞典』（株）雄山閣

※発掘調査報告書類については割愛させていただいた。



１．中尾第１遺跡、２．上伊勢第１遺跡、３．三保第１遺跡、４．井図地頭遺跡、５．井図地中ソネ遺跡、６．三林遺跡、７．笠見第３遺跡、**８．中道東山西山遺跡**、９．久蔵谷遺跡、10．久蔵峰北遺跡、11．蝮谷遺跡、12．岩本遺跡、13．八橋第８・９遺跡、14．別所中峯遺跡、15．松谷中峰遺跡、16．化粧川遺跡、17．福留遺跡、18．八幡遺跡、19．南原千軒遺跡、20．湯坂遺跡、21．箆津乳母ヶ谷第２遺跡、22．梅田所在遺跡、23．梅田萱峯遺跡、24．逢束双子塚古墳、25．逢束遺跡、26．逢束第２遺跡、27．槻下豪族居館跡、28．槻下古墳群、29．下斎尾２号遺跡、30．水溜り・鴛籠据場遺跡、31．大高野遺跡、32．大高野古墳群、33．塚本古墳群、34．斎尾古墳群、35．下斎尾１号遺跡、36．斎尾廃寺、37．伊勢野遺跡、38．金屋経塚、39．森藤第１・２遺跡、40．大峰遺跡、41．西高尾谷奥遺跡、42．大法古瓦出土地、43．大法３号墳、44．上法万経塚、45．杉地古墳群、46．下光好古墳群、47．公文古墳群、48．山田１号墳、49．妙見山城跡、50．竜ヶ崎古墳群、51．三保遺跡、52．三保６号墳、53．田越銅剣出土地、54．田越第４遺跡、55．笠見第２遺跡、56．笠見第１遺跡、57．八橋城跡、58．八橋銅鐸出土地、59．久蔵峰銅鉾出土地、60．八橋第２遺跡、61．八橋第４遺跡、62．八橋狐塚古墳、63．別所女男岩峯遺跡、64．別所２号墳（別所尻古墳）、65．別所１号墳（笠取塚古墳）、66．別所古墳群、67．墓ノ上遺跡、68．松谷遺跡、69．出上岩屋古墳、70．太一垣城跡、71．太一垣古墳群、72．大仏山城跡、73．山川城跡、74．梅田古墳群、75．坂ノ上古墳群、76．箆津古墳群、77箆津城跡

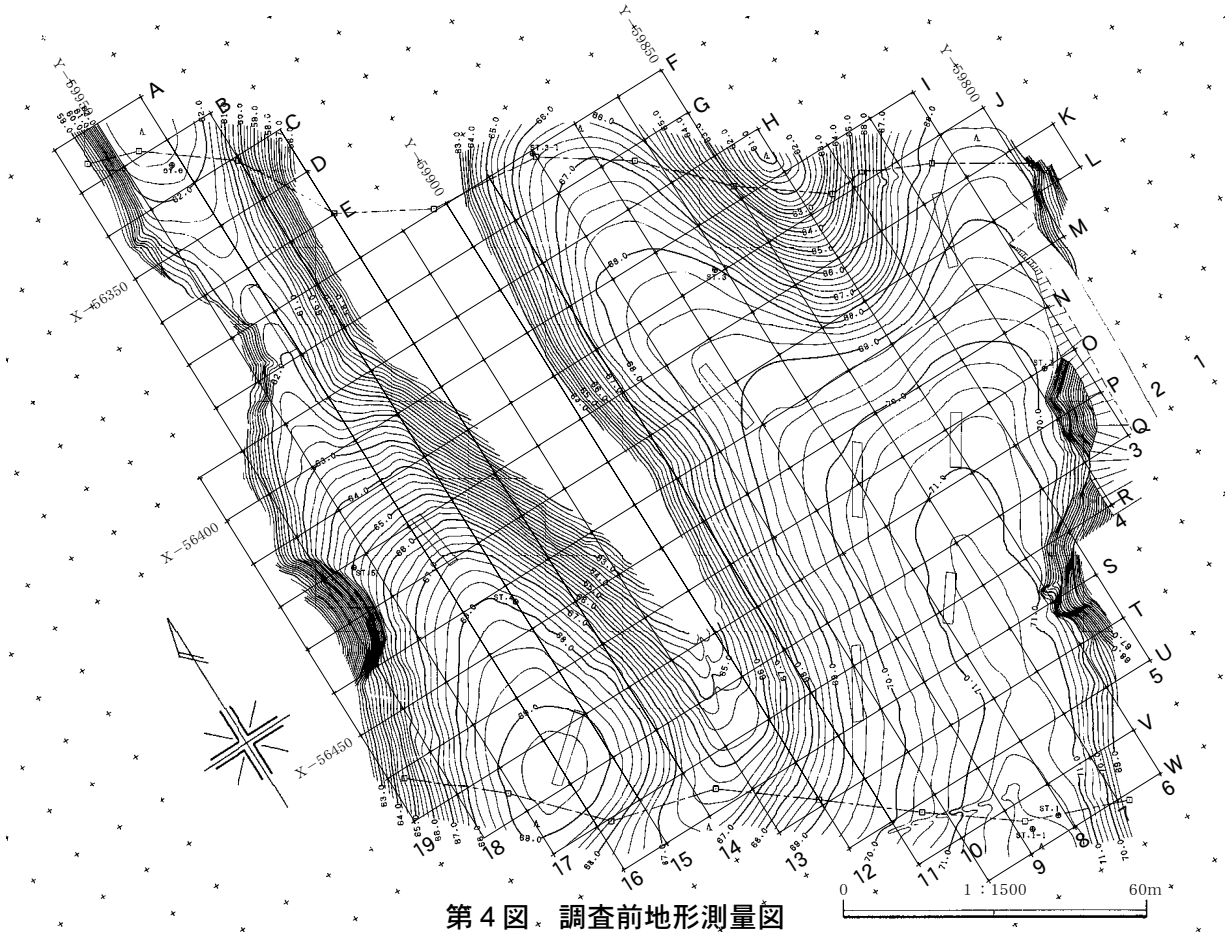
第３図　周辺遺跡分布図

第３章　遺跡の概要

第１節　調査の方法

中道東山西山遺跡は地形的特徴から「東山」「西山」「谷部」という３つの小区に分かれ、調査は西側尾根部である「西山」から着手した。遺構検出は調査区南寄りと谷部を除き、基本的に第Ⅴ層ソフトローム層（本章第２節参照）上面で行った。西山では、同じ褐色系埋土をもち平面検出が困難な遺構が精査の過程で確認されたことから、グリッドラインに沿ってサブトレンチを設定し、土層断面も合わせて遺構検出に努めた。さらに、遺構が密に存在すると予想された尾根頂部平坦面付近（Ｎ・Ｏ15～16グリッドなど）にかけては、グリッド単位で第Ⅵ層上面まで面的に掘り下げ、改めて遺構検出を行った。一方、東山は先行する西山の調査成果に基づいて適宜サブトレンチを設定しながら精査を行った。調査区北側中央に谷が抉入しているが、ここは谷部と異なり遺物包含層が非常に薄く、遺構面も１面であった。多数検出された製炭土坑については炭化材・被熱面のサンプルを採取し、その一部は土坑の時期や操業温度を明らかにする目的で理科学分析を行っている。

東山南寄りと谷部では鍛冶関連遺構・遺物の存在に注意を払いながら調査を進めた。ＳＢ６・７については、鍛冶炉を中心に１辺25cmのメッシュを約２×２ｍの範囲に組んで掘り下げ、炉・土坑の埋土と床面に堆積した土砂を全量持ち帰って水洗選別し、鍛造剥片や粒状滓といった微細な鍛冶関連遺物の抽出と分析を行った。（高尾）



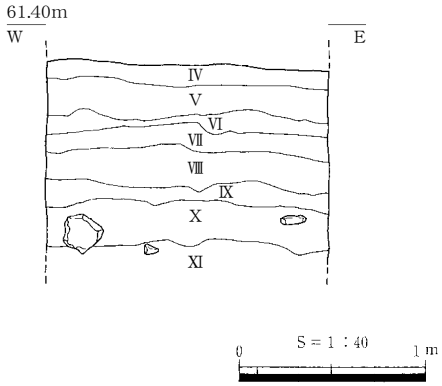
第４図　調査前地形測量図

第２節　調査地内の土層堆積

中道東山西山遺跡は標高67～71mの東西２つの尾根と、それに挟まれた南北に走る谷地形からなる遺跡である。

当遺跡が立地する大山東麓一帯は、古期大山噴出物からなる溝口凝灰角礫岩の上に、新期大山が噴出した降下テフラが累積した台地状地形であり、浸食作用によって大小の谷が開析されている。降下テフラは下位のものから大山最下部火山灰層・下部火山灰層・中部火山灰層・上部火山灰層に大きく分けられている（岡田ほか1995）。

土層堆積状況は、東山・西山地区の北半部はほぼ共通し、谷部と東山・西山南寄りは古代の包含層が介在することにより、異なった状況を呈している。そこで、東山・西山地区の基本層序の概要を西山丘陵尾根部に設定したトレンチ断面によって（第５図）、谷部と東山・西山地区南寄りの層序を調査区南壁断面（第６・７図）によって説明したい。



Ⅳ褐色土	径１cm以下の小礫、炭化物を含む。粘性・しまり弱。
Ⅴ褐色土	（ソフトローム）Ⅱ層に比べ粘性強く、色調暗い。
Ⅵ淡黄褐色土	径0.5cm以下の白色砂粒を含む。遺構確認面。
Ⅶ青灰色砂質層	（ホーキ層）拳大の青灰色砂質ブロックが堆積するが、部分的にⅥ層が混入。粘性弱・しまり強。
Ⅷ明黄褐色砂質土	径１cm以下の黄・灰・クリーム色のスコリア多量。径0.5mm以下のパミスも混入。火山性の砂質層である。
Ⅸ明黄褐色土	（ＡＴ層）　火山性の砂質層。粘性・しまり強。
Ⅹ白色粘質土	径５～10cm以下の青灰色砂礫を含む。粘性・しまり強。
Ⅺ桃色粘質土	人頭大の大形礫を含む。粘性・しまり強。

第５図　西山基本層序

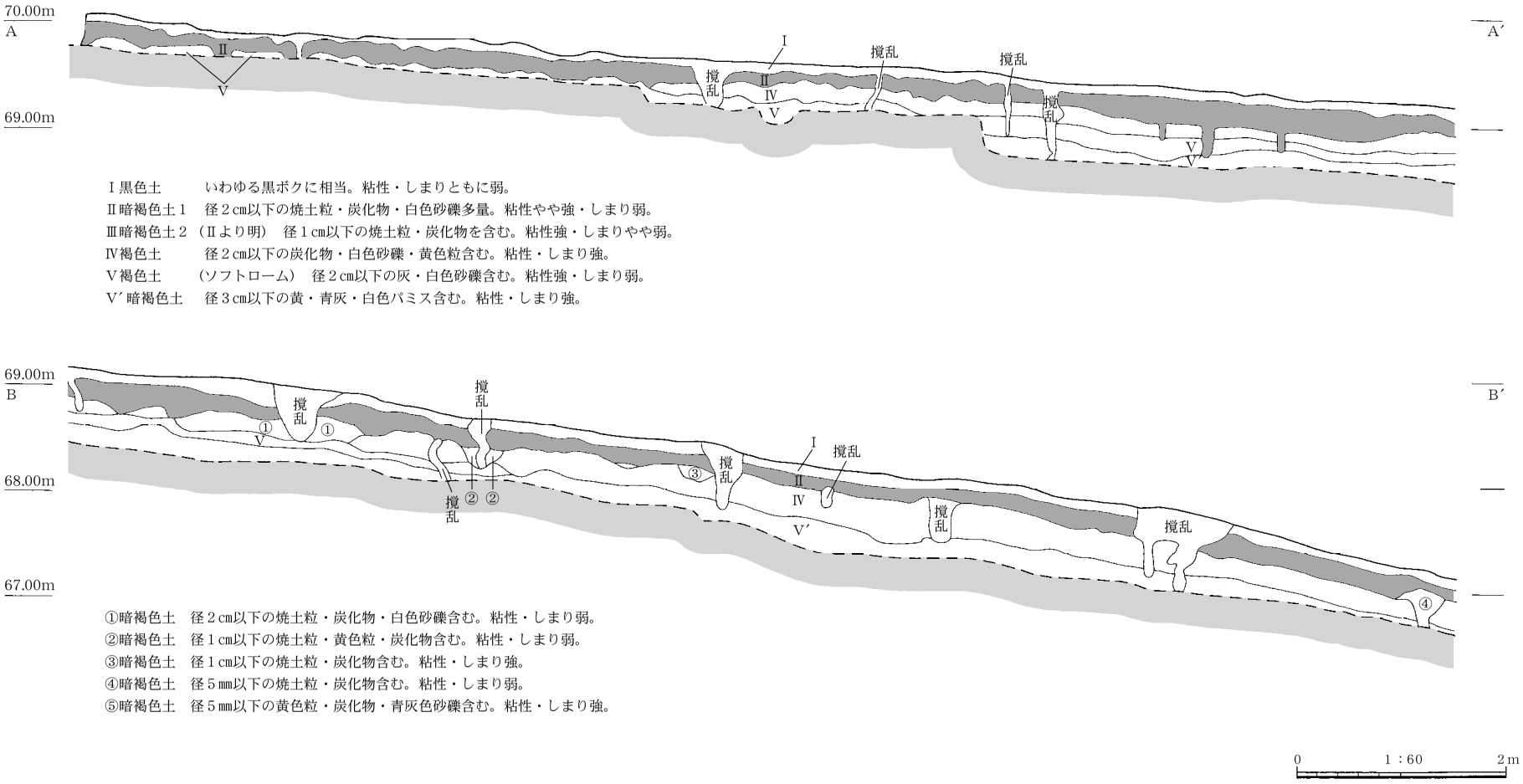
西山・東山層序　中道東山西山遺跡は、表土の形成が10～15cmと未発達であることが特色である。第Ⅰ層表土下に弥生時代の包含層である第Ⅳ層褐色土が堆積し、その下部に同じく褐色を呈した第Ⅴ層ソフトローム層、第Ⅵ層淡黄褐色土層、第Ⅶ層上のホーキ層、第Ⅷ層軽石混じりの黄褐色ローム層、上部火山灰層の基盤であり約25,000年前の鍵層として著明な第Ⅸ層姶良Ｔｎ火山灰層（ＡＴ層）と続いている。遺構確認面は第Ⅴ層上面としたが、第Ⅳ・Ⅴ層の土質が近似していること、遺構埋土も弥生時代以前のものについては褐色土が主体となっていることから、第Ⅵ層を確認面とした範囲もある。その下位に中部火山灰層に相当する第Ⅹ層白色粘質土層、第Ⅺ層桃色粘質土層が堆積していた。第Ⅺ層中には礫が多く混入し基盤層を呈している。

谷部層序　東山・西山調査区南寄りと谷部には古代の遺構が群在し、弥生時代の包含層と重層している。谷底部付近の標高は約65mであり、調査区内で最も高い東山との比高差は６ｍを測る。層序は、第Ⅰ層表土下、古代の包含層である第Ⅱ・Ⅲ層暗褐色土が堆積し、後者は谷部のみに認められる。第Ⅱ層の層厚は10～20cm弱であり、９世紀の遺物が主体となり、弥生時代後期に帰属する遺物が若干混入している。とくに平安時代に帰属する遺物として製鉄・鍛冶関連遺物が多く、鍛冶関連遺構が東山・西山変換点に位置していることも、本層は調査の重要な視点となった。第Ⅲ層中には下層の褐色土がブロック状に含んでいることからⅡ層よりも色調が明るく、丘陵尾根部からの流れ込みも想定される。

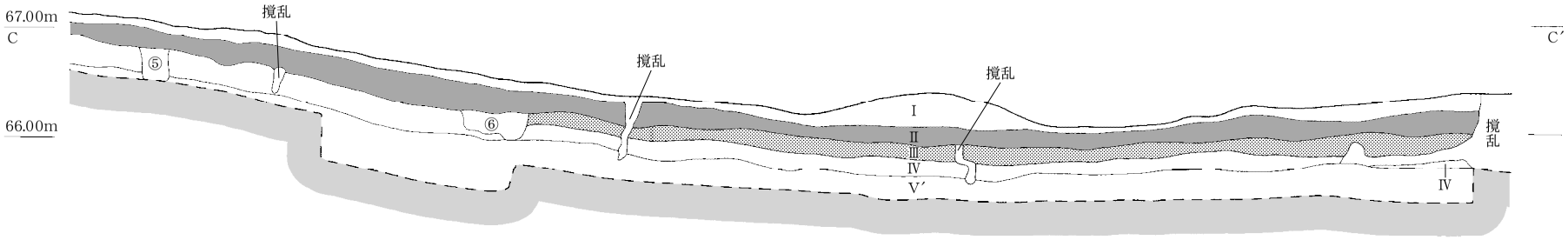
東山・西山調査区南寄りの範囲においては、第Ⅱ層上面を遺構確認面としている。第Ⅳ層は褐色土であり、西山・東山でみられる弥生時代の包含層である。谷部については本層を第２遺構面として遺構確認作業を行ったが、ピット等が数基確認されたのみであった。第Ⅴ層はソフトローム層であり、無遺物層である。Ⅴ′層は谷部のみに堆積する２次堆積ロームと考えられる。本層をもって谷部の調査を終了した。

（小口）

【参考文献】
岡田昭明　1995『野外研修案内書　大山テフラと蒜山原』日本地学教育学会第49回全国大会実行委員会



第６図　東山～谷部土層断面図（１）



⑥暗褐色土　径１cm以下の焼土粒・炭化物・白色砂礫含む。粘性・しまり弱。
⑦暗褐色土　径１cm大の青灰色砂礫含む。粘性・しまり弱。
⑧褐色土　　径５mmの炭化物・青灰色砂礫含む。粘性・しまり弱。

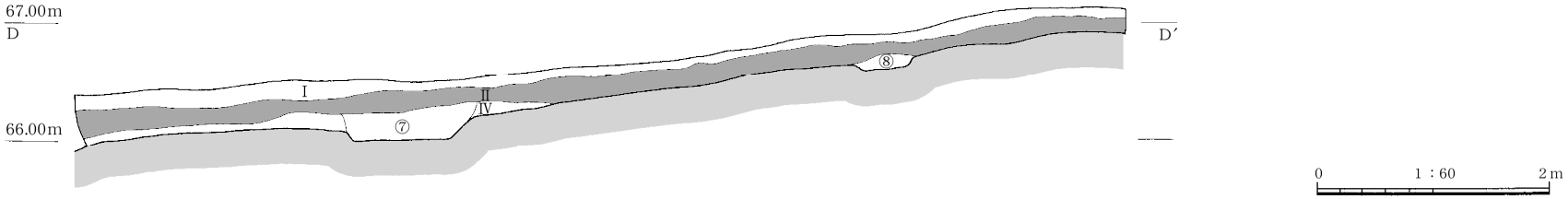
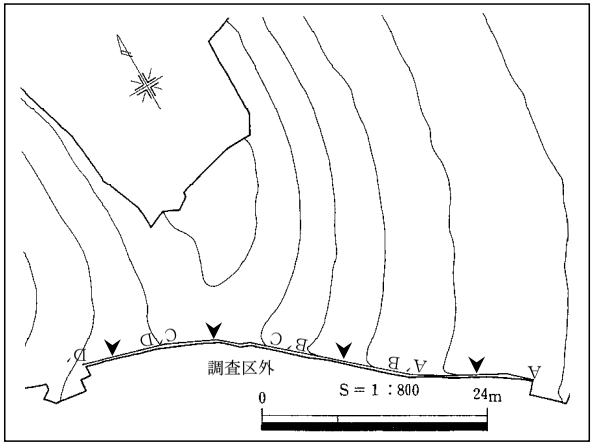
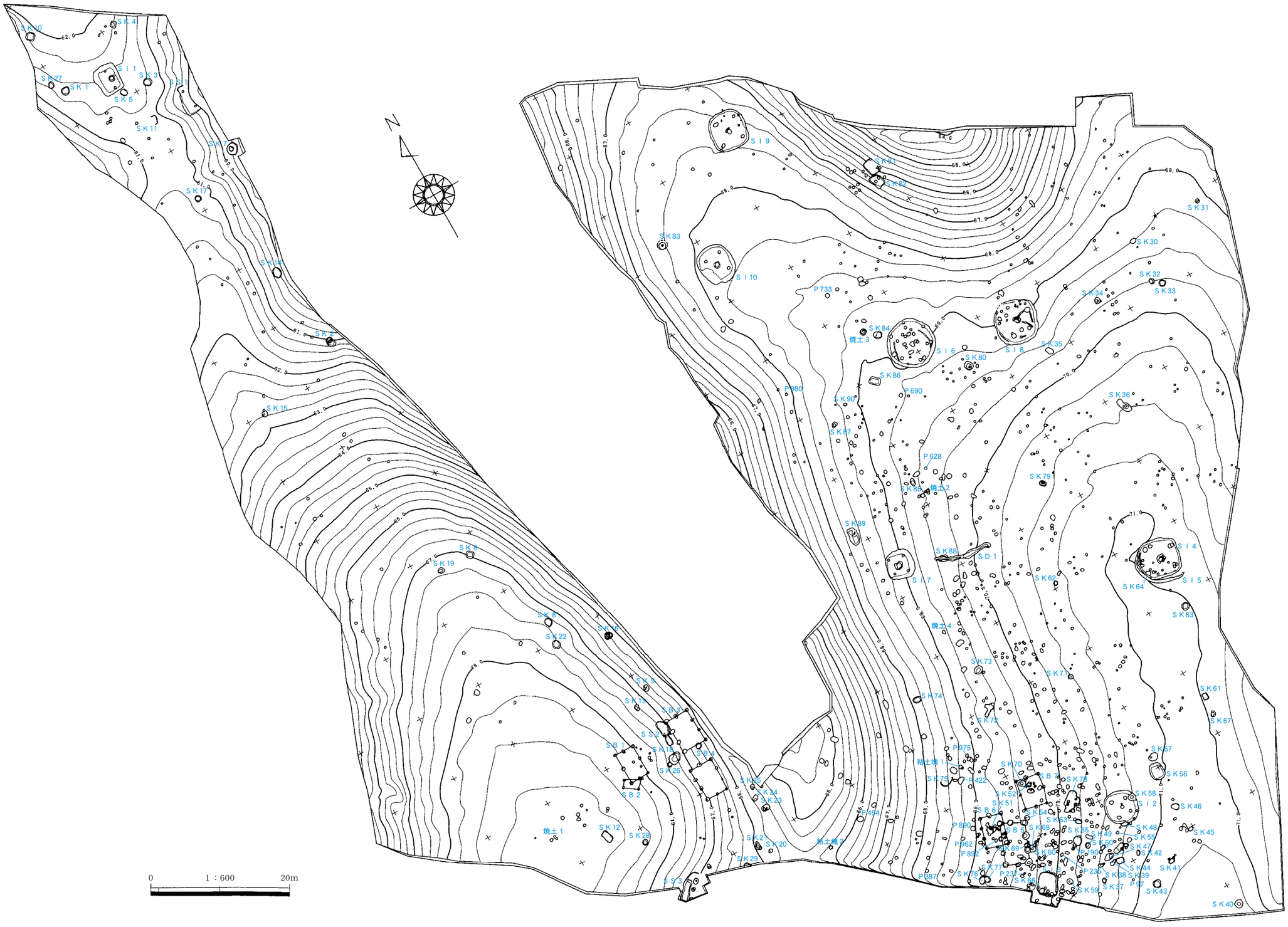


写真３　南壁土層断面



第８図　土層断面図配置模式図

第７図　東山～谷部土層断面図（２）



第９図　中道東山西山遺跡遺構配置図

第３節　遺構の概要

中道東山西山遺跡では、竪穴住居跡10棟、掘立柱建物跡７棟、土坑90基、段状遺構３基、溝１条、そして多数のピットを検出した。調査前は檜の植林地であったが大きな撹乱は無く、遺構の遺存状況は良好であった。

東山で検出された竪穴住居（建物）跡は弥生時代後期後葉から終末期前半に属すもので、概ね一辺５ｍ前後で平面形が隅丸方形を呈するものと、径（長軸）６ｍ超で平面多角形を呈するものがみられる。相対的に小型である前者は西側斜面部傾斜変換点付近～緩斜面、大型の後者は尾根頂部平坦面という立地面での特徴があり、ＳＩ６と８を除き、互いに約20m程度の間隔をもって築かれている。

掘立柱建物跡は谷部を挟んでＳＢ１～４が西山東側、ＳＢ５～７が東山西側の傾斜変換点から斜面部にかけて築かれている。ＳＢ５・６は柱穴出土土器から９世紀に属するものと推定され、他のＳＢ１～４・７については帰属時期を明確にできる遺物が出土していないが、本章第２節で述べたとおりⅡ層に含まれる土器が９世紀を主体とすることから、ＳＢ５・６とほぼ同時期の建物跡である可能性が高い。ＳＢ６・７の建物内中央部には鍛冶炉が設けられており、炉の規模・構造および出土遺物などから鍛錬鍛冶を行った鍛冶工房であると考えられる。

鍛冶関連遺構としては他に西山調査区南端で検出されたＳＳ３も挙げられる。ＳＳ３の埋土中から出土した鉄滓の中には、製錬段階に排出されるものが含まれていた。鍛冶関連遺構以外にも、谷部で鉄滓・鉄床石などが出土していることから、調査地南側の一画が９世紀段階に鉄器生産の場であったことが明らかとなった。

土坑のうち、時期と性格を明らかにできるものは検出総数に比して少ない。形態的特徴から、縄文時代の落し穴と推定されるものが５基、貯蔵穴と推定されるものが３基検出されている。他に、形態的特徴や壁面・底面の被熱状況、炭化材の出土状況などから簡易な炭焼きを行ったと考えられる土坑（製炭土坑）が16基、調査地内に散在する状況で検出され、それらの帰属時期が不詳であるが、特筆すべき遺構の一つといえよう。（高尾）

表１　新旧遺構名対照表

報告時遺構名	調査時遺構名
ＳＫ10	ＳＫ31
ＳＫ11	ＳＫ32
ＳＫ12	ＳＫ33
ＳＫ15	ＳＫ36
ＳＫ16	ＳＫ52
ＳＫ19	ＳＫ56
ＳＫ22	ＳＫ57
ＳＫ29	ＳＫ73
ＳＫ30	ＳＫ109
ＳＫ31	ＳＫ99
ＳＫ32	ＳＫ100
ＳＫ33	ＳＫ101
ＳＫ34	ＳＫ107
ＳＫ35	ＳＫ108
ＳＫ36	ＳＫ103
ＳＫ43	ＳＫ26
ＳＫ49	ＳＫ106
ＳＫ51	ＳＫ104
ＳＫ52	ＳＫ105

報告時遺構名	調査時遺構名
ＳＫ54	ＳＫ80
ＳＫ56	ＳＫ34
ＳＫ57	ＳＫ35
ＳＫ63	ＳＫ49
ＳＫ64	ＳＫ95
ＳＫ66	ＳＫ75
ＳＫ69	ＳＫ70
ＳＫ72	ＳＫ102
ＳＫ73	ＳＫ96
ＳＫ74	ＳＫ84
ＳＫ75	ＳＫ82
ＳＫ76	ＳＫ64
ＳＫ79	ＳＫ83
ＳＫ80	ＳＫ92
ＳＫ81	ＳＫ97
ＳＫ82	ＳＫ98
ＳＫ83	ＳＫ93
ＳＫ84	ＳＫ91
ＳＫ86	ＳＫ94

報告時遺構名	調査時遺構名
ＳＳ２	ＳＫ15・43
ＳＳ３	ＳＫ74
焼土１	西山・焼土遺構
焼土２	Ｎ９グリッド焼土
焼土３	Ｌ８グリッド焼土
被熱粘土塊１	R10グリッド焼成粘土塊
被熱粘土塊２	R12グリッド焼成粘土塊

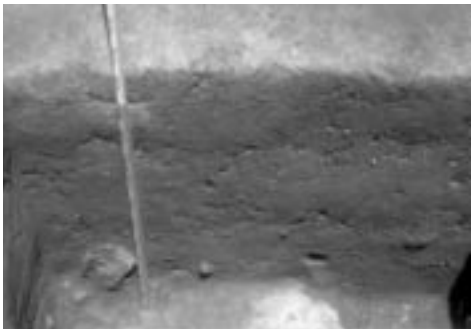


写真４　西山基本層序

第４章　調査の成果と記録

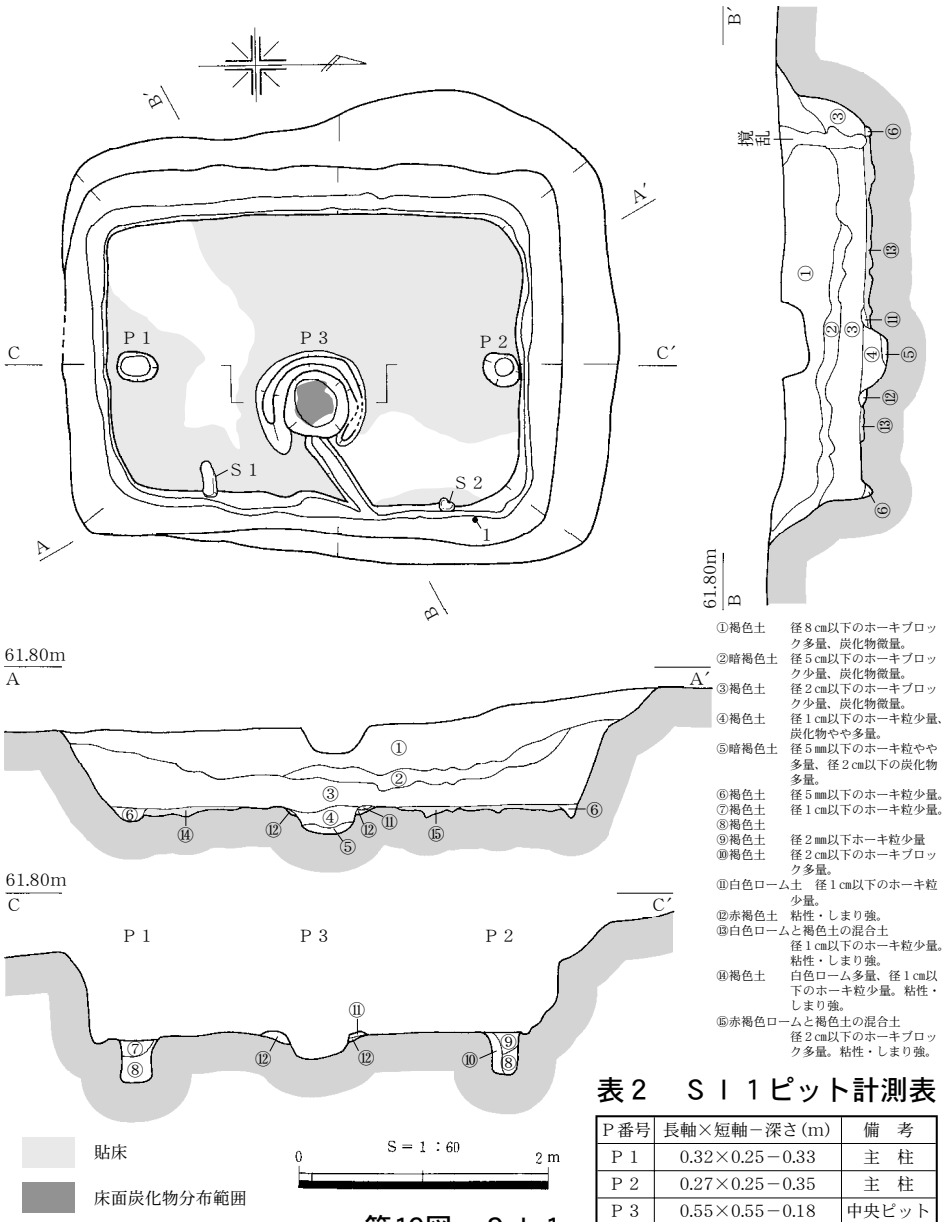
第１節　竪穴住居（建物）跡

ＳＩ１（第10・11図、表２～４、PL.２・28・41）

位置　Ｃ16グリッド、標高61.6mの緩斜面に位置する。

調査の経過　表土除去後、Ｖ層精査中、炭化物を含むＶ層に近似した褐色土の不整長方形プランを確認したため、サブトレンチを設定し、遺構の有無を確認したところ竪穴住居の可能性が高いと判断され、調査を行った。

規模と形態　南側および壁面上部が崩落していたため、検出プランは不整長方形であったが、本来の規模･形態は長軸4.0m、短軸2.9mの長方形である。検出面から床面までの深さは最大84㎝を測り、残存状況は良好といえる。床面はＸ・Ⅺ層まで掘り込まれた後、褐色土とハードロームの混合土を用い、ほぼ全面に貼床が付される。床面積は約7.0㎡である。



第10図　ＳＩ１

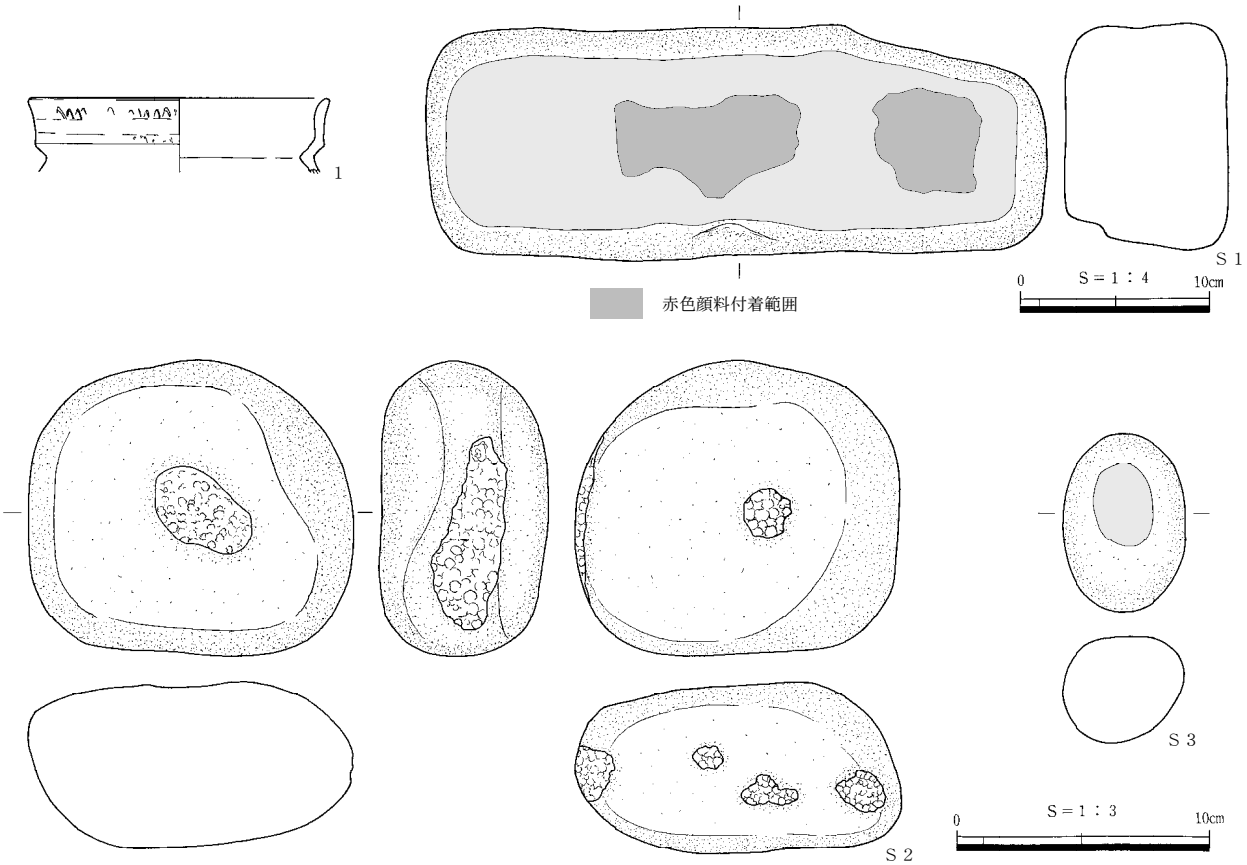
床面において壁溝、主柱穴、中央ピットを検出した。壁溝は全周し、断面形態はＵ字状を呈し、床面からの深さは２～４㎝を測る。主柱穴はＰ１・２で２本柱になり、壁面に近接し配される。柱穴間距離は2.9mである。中央ピット（Ｐ３）は床面中央よりやや東側に位置し、周堤を伴う。周堤は中央ピットを二段に掘り込んだ後、⑪・⑫層を貼付け構築している。

埋土　Ｖ層に近似した褐色土が主体をなし、３層に分層され、ホーキブロックの混入がみられる。堆積状況は自然堆積の様相を示す。中央ピットの埋土は２層に分層され、下層には多量の炭化物が含まれる。

出土遺物　遺物は埋土

表２　ＳＩ１ピット計測表

Ｐ番号	長軸×短軸－深さ(m)	備　考
Ｐ１	0.32×0.25－0.33	主　柱
Ｐ２	0.27×0.25－0.35	主　柱
Ｐ３	0.55×0.55－0.18	中央ピット



第11図　ＳＩ１出土遺物

表３　ＳＩ１出土土器観察表

遺物No.	遺構 層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
1	ＳＩ１ ３層床直	弥生土器 甕	※15.4 △4.0	口縁部1/4	外面：口縁部波状文２段施文後ナデ消し 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	密　径２㎜以下の石英	外面：橙色 内面：橙色	良好	

表４　ＳＩ１出土石器観察表

遺物No.	出土位置	層位	器種	石材	法量				備考
					長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	
Ｓ１	ＳＩ１	床直	台石	安山岩	33.1	8.6	12.4	6870.0	表面磨面・赤色顔料付着
Ｓ２	ＳＩ１	床直	台石	安山岩	11.7	6.7	12.8	1590.0	表裏・側・下面敲打痕
Ｓ３	ＳＩ１	埋土	磨石	安山岩	7.1	4.2	4.8	200.0	表面磨面

中よりⅥ様式に比定される土器片、床面より石器が出土しており、４点を図示した。１は甕で口縁部に波状文を２段施文後、ナデ消す。Ｓ１・２は台石でＳ１は床面より出土しており、磨面に赤色顔料が付着する。Ｓ２は表裏・側・下面に敲打痕が認められる。

時期　出土土器がいずれも清水編年Ⅵ－１・２様式の範疇に収まることから、弥生時代終末期～古墳時代初頭と考えられる。なお、周辺において当該期の遺構はＳＳ１のみであるが、本遺構は調査区北側縁辺部に位置することを考慮すると、当該期集落が調査区外に広がる可能性があることを留意する必要がある。（福井）

ＳＩ２（第12～15図、表５～８、PL.３・28～31・41・46・49）

位置　Ｔ８グリッド、標高70.5～70.8mの緩斜面部に位置し、ＳＫ48・58に切られる。近接する同時期の遺構として、ＳＩ３が約11m南西側に位置する。

調査の経過　Ⅴ層上面で弥生土器・炭化物を含む径約5.5mの褐色土のプランを検出した。サブトレンチ（Ａ－Ａ′ライン）によって、壁溝、ピットを確認したため、竪穴住居跡と判断し調査を進めた。

規模と形態　平面形は東西4.9m、南北4.8mの隅丸方形を呈し、床面積は14.3㎡である。壁高は東壁で最大66㎝を測る。竪穴はⅦ層を床面とするが、地形的に低い西側の壁面付近ではⅥ層を床面としている箇所も認められた。床面で検出されたピットは６基で、Ｐ１～Ｐ４が主柱穴と考えられる。柱穴間距離は、Ｐ１－Ｐ２間から順に2.2m、2.1m、2.5m、2.2mを測る。Ｐ５は中央ピットである。

断面逆台形の壁溝が全周しており、幅は３～10㎝、深さは最大で８㎝を測る。Ｐ１－Ｐ４間およびＰ３北東側の床面には焼土面が形成されており、前者は36×24㎝の不整楕円形、後者は62×42㎝の範囲に広がる不整形を呈す。どちらも掘り方をもたず、床面が被熱し変色していた。

埋土と遺物の出土状況　住居廃絶後に周壁沿いに壁体崩落土と見られる⑪・⑫層が堆積し、各主柱穴下半も地山（Ⅶ層）ブロックを含む⑮～⑲層で埋まる。住居は埋没途中で窪地状となり、そこにロームブロックを多量に含む⑦～⑨層が入る。⑦層には多量の土器と被熱・破砕した礫片が混入していることから、これらの層は人為的に埋め戻されたものであり、窪地状となった本住居跡は廃棄土坑として利用されたと考えられる。住居中央付近の床面直上や各ピット上層でも土器片が出土しており、廃棄行為が行われた時点では住居中央部付近はほとんど埋没が進んでいなかったと理解できる。その後、上層にかけてレンズ状の堆積となることから自然堆積により埋没していったと推測される。

床面直上から⑪層に包含されて弥生土器甕２・３・５、壷４、器台６、凹石Ｓ11、台石Ｓ12が出土した。他は20～22を除きすべて⑦層から出土している。⑦層に包含される床面出土土器には上記土器と接合するものがあるため、本来的には本住居廃絶時に残された土器も含まれる可能性が高い。

出土遺物　２・３は外傾する口縁部外面に施した多条平行沈線をナデ消す。どちらも胴部中位付近に最大径をもち、２の底部は胴部との境が不明瞭で尖底化しつつある。６の脚裾有段部外面はナデ調整のみで、脚部の立ち上がり角度からすれば台付甕（壷）の脚台となろうか。11は胴部下半が残存しており、波状文が認められる位置に胴部最大径がくると考えられるため、扁球状を呈す胴部であった可能性が高い。13・14は接合しないが、口縁（脚裾）外面の文様構成・施文原体が同じで、胎土・色調も酷似することから、同一個体の可能性もある。注口20、土師器甕21、須恵器甕22はⅡ層と同質の①層に伴うもので、混入品である。Ｓ４・５・10は磨面と敲打痕が認められる。Ｓ６～９は敲石、Ｓ12・13は台石である。Ｓ11は凹石で、表面に赤色顔料が付着していた。Ｆ１は棒状の鉄器片である。

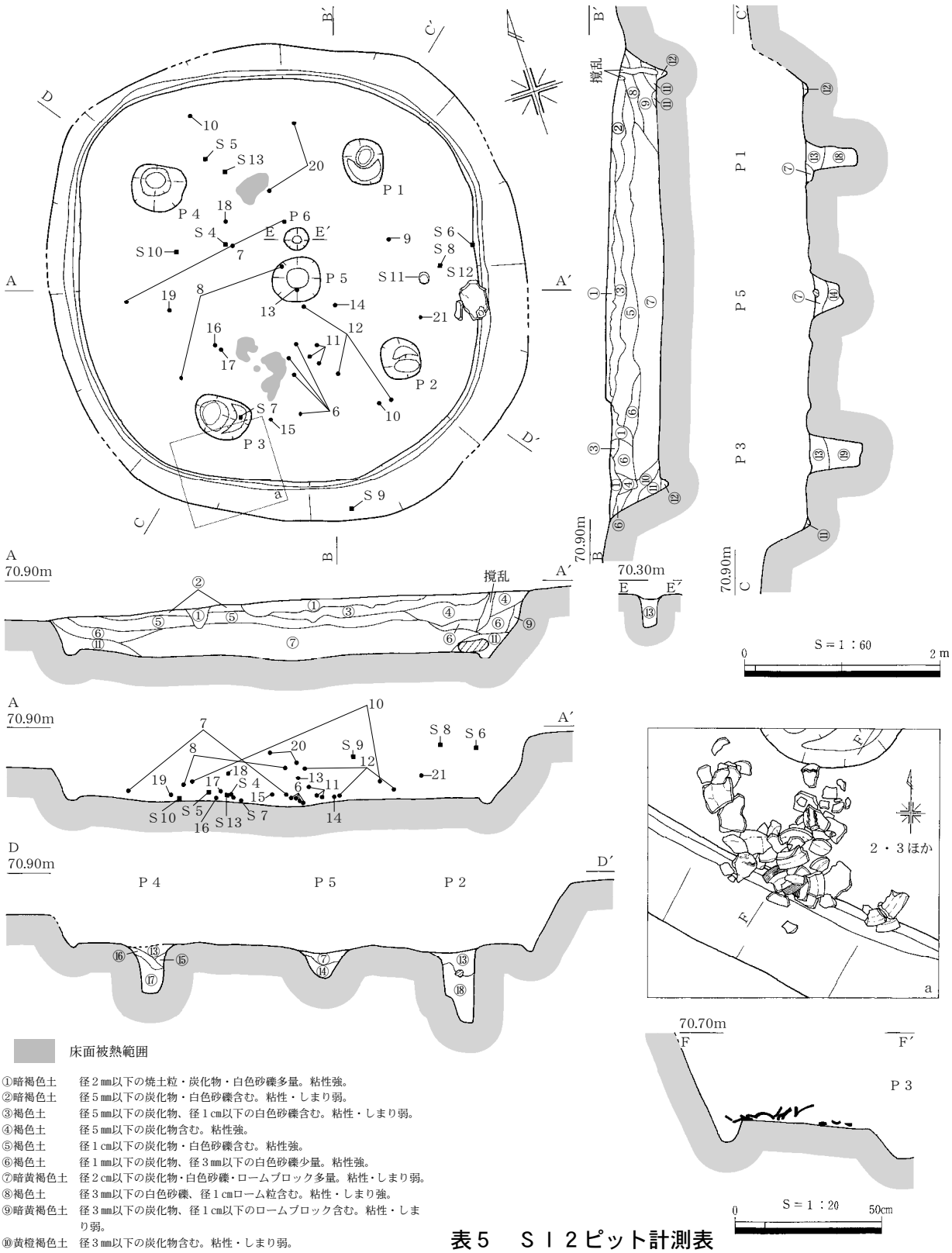
時期　⑦層出土土器にＶ－３様式、弥生時代後期後葉を下るものは認められないが、13はＳＩ３埋土中出土土器と接合しており、土器廃棄を伴った⑦層による埋没時期は終末期まで下る可能性が高い。床面直上出土土器も概ねＶ－３様式の範疇で捉えられると考えるが、２・３の胴部～底部形態にみられる特徴はやや新相を示すこと、住居の廃絶から⑦層による埋没までの期間は短いと推測されることなどから、ＳＩ２の廃絶時期は弥生時代後期後葉～終末期と幅をもたせておく。（高尾）

ＳＩ３（第16～18図、表９～11、PL.４・31・32・40・41）

位置　Ｔ10グリッド、東山南端の台地平坦部、標高約70.0mに位置する。

調査の経過　第Ⅱ層暗褐色土の精査中に約３×４mの範囲にわたって多くの土器と焼土粒子・炭化物を含む暗褐色土のプランを検出した。当初は、やや規模の大きい土坑を想定したが、長軸と短軸にサブトレンチを設定し掘り下げを行ったところ、底面に焼土面が確認され、さらに東壁から南壁かけて幅約15㎝の壁溝がめぐっていることがわかり竪穴建物跡と判断した。

規模と形態　平面形態は3.5×3.0mの隅丸長方形を呈し、床面積は８㎡を測る。床面の標高は69.7



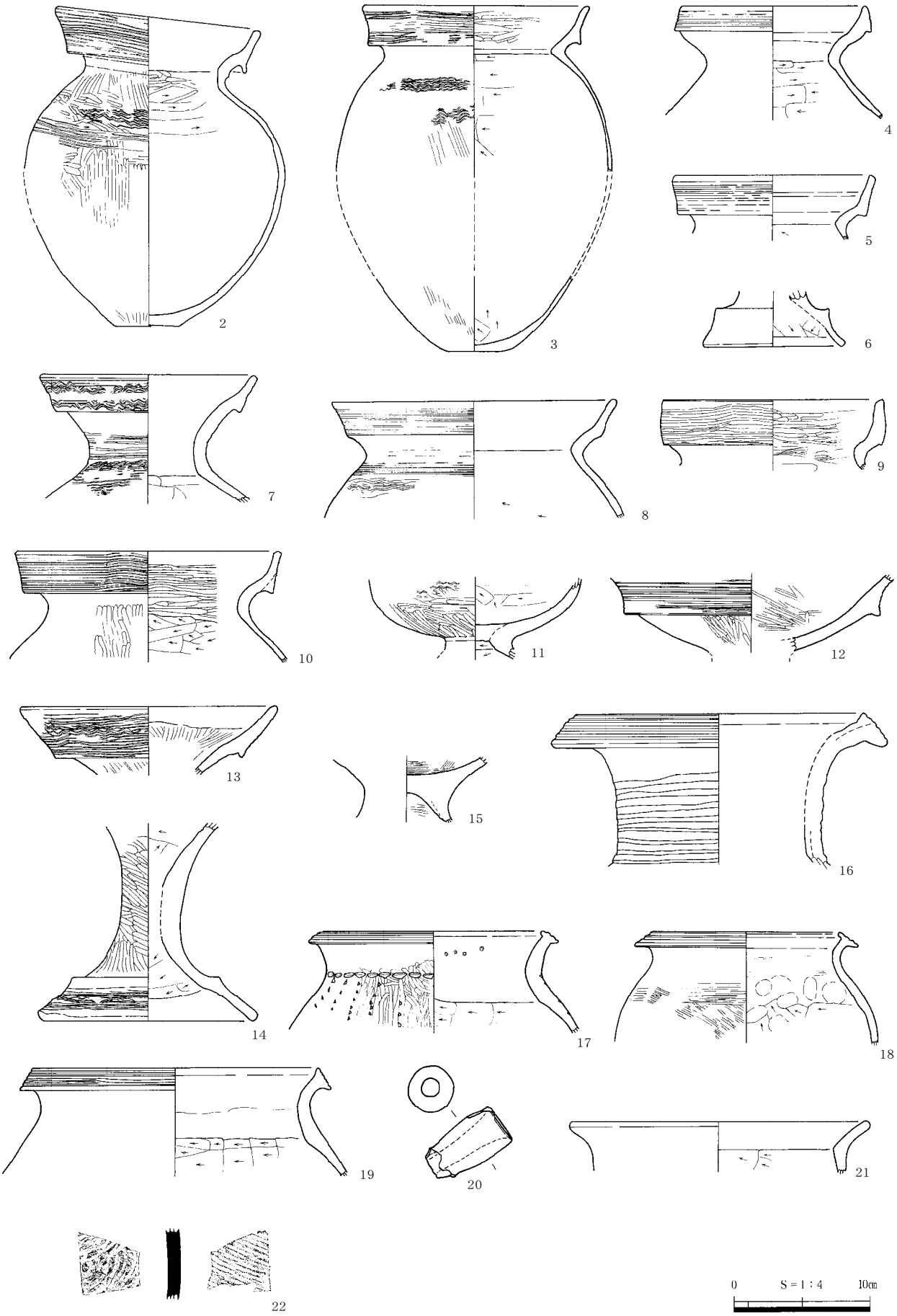
床面被熱範囲

①暗褐色土　径２㎜以下の焼土粒・炭化物・白色砂礫多量。粘性強。
②暗褐色土　径５㎜以下の炭化物・白色砂礫含む。粘性・しまり弱。
③褐色土　径５㎜以下の炭化物、径１㎝以下の白色砂礫含む。粘性・しまり弱。
④褐色土　径５㎜以下の炭化物含む。粘性強。
⑤褐色土　径１㎝以下の炭化物・白色砂礫含む。粘性強。
⑥褐色土　径１㎜以下の炭化物、径３㎜以下の白色砂礫少量。粘性強。
⑦暗黄褐色土　径２㎝以下の炭化物・白色砂礫・ロームブロック多量。粘性・しまり弱。
⑧褐色土　径３㎜以下の白色砂礫、径１㎝ローム粒含む。粘性・しまり強。
⑨暗黄褐色土　径３㎜以下の炭化物、径１㎝以下のロームブロック含む。粘性・しまり弱。
⑩黄橙褐色土　径３㎜以下の炭化物含む。粘性・しまり弱。
⑪黄橙褐色土　径１㎜以下の炭化物微量。粘性・しまり強。
⑫黄橙褐色土　径１㎜以下の炭化物微量、径３㎜以下の砂礫含む。粘性・しまり強。
⑬暗褐色土　径２㎜以下の炭化物、径５㎜以下の砂礫・ロームブロック含む。粘性強。
⑭暗褐色土　径２㎜以下の焼土粒・炭化物、径５㎜以下のロームブロック含む。粘性・しまり弱。
⑮褐色土　径１㎝以下のホーキ粒含む。粘性やや強。
⑯暗黄褐色土　径５㎜以下の砂礫、径１㎝以下のロームブロック含む。粘性・しまり弱。
⑰褐色土　径２㎜以下の炭化物含む。粘性・しまり弱。
⑱黄褐色土　径１㎝以下のホーキブロック含む。粘性・しまり弱。
⑲褐色土　径２㎜以下の炭化物、径１㎝以下のホーキブロック含む。粘性・しまり弱。

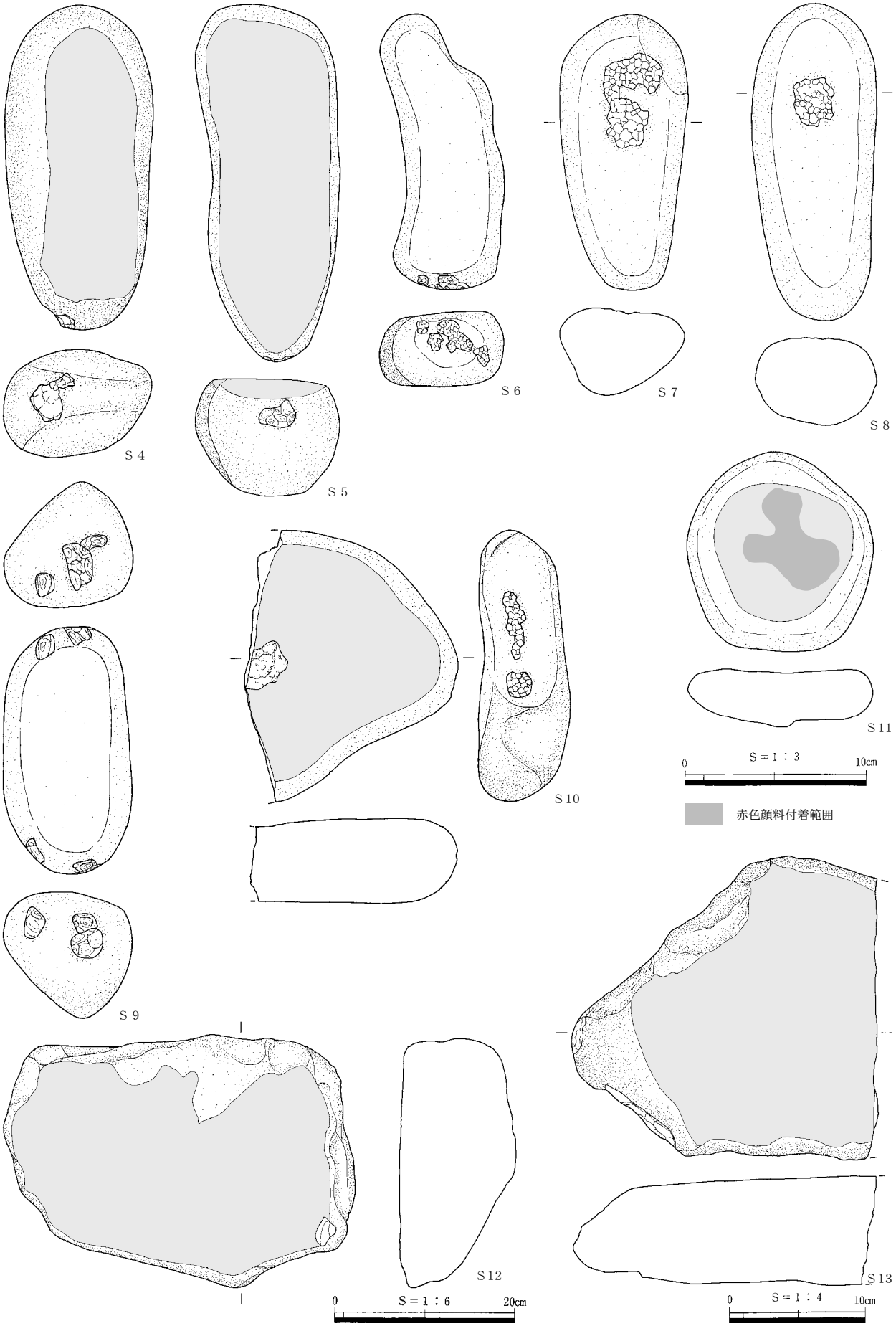
表５　ＳＩ２ピット計測表

Ｐ番号	長軸×短軸－深さ(m)	備　考
Ｐ１	0.5×0.41－0.55	主　柱
Ｐ２	0.44×0.4－0.68	主　柱
Ｐ３	0.59×0.42－0.55	主　柱
Ｐ４	0.58×0.48－0.51	主　柱
Ｐ５	0.5×0.46－0.3	中央ピット
Ｐ６	0.25×0.21－0.35	

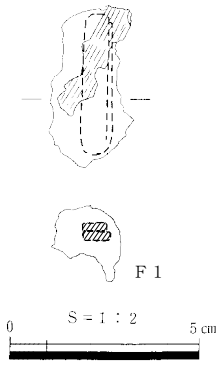
第12図　ＳＩ２



第13図　ＳＩ２出土遺物（１）



第14図　ＳＩ２出土遺物（２）



第15図　ＳＩ２出土遺物（３）

ｍである。検出面から床面まで最も残存する壁高は北壁で最大30㎝、一方、谷部斜面側の西壁は約12㎝と浅い。東壁から南壁にわたって最大幅15㎝、深さ約５㎝の壁溝がめぐるが、北壁から西壁にかけては認められない。ソフトローム層を床面としており、硬化面・貼床は確認されなかった。検出されたピットは、南壁寄りのほぼ中心部に１ヶ所あり（Ｐ１）、規模は長軸0.45ｍ、短軸0.36ｍ、深さ0.5ｍである。床面積は８㎡と狭いが、床面上には被熱面が４ヶ所検出された。そのなかで中心部に位置する２ヶ所の被熱面は、径60×50㎝、径40×40㎝の範囲にわたって強く焼き締まって

表６　ＳＩ２出土土器観察表

遺物No.	遺構 層位	器種	口径(㎝) 器高(㎝)	残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
2	ＳＩ２ 床直	弥生土器 甕	14.7 23.5	4/5	外面：口縁部多条平行沈線後ナデ消し・下端部～頸部ヨコナデ、肩部波状文・平行沈線後ヘラミガキ、胴部ヘラミガキ 内面：口縁部上半ヘラミガキ・下半ヨコナデ、頸部工具ナデ、肩～胴部上半ヘラケズリ、胴部下半ヘラケズリ後ナデ	密　２㎜以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	口縁・肩部以下煤付着
3	ＳＩ２ 床直	弥生土器 甕	16.1 ※25.5	3/4	外面：口縁部多条平行沈線後ナデ消し、肩部波状文２段施文後上下ナデ消し、胴部下半ヘラミガキ 内面：口縁部ヘラミガキ、頸～胴部ヘラケズリ	密　３㎜以下の白色砂粒	外面：暗灰黄色 内面：にぶい黄色	良好	口縁～底部煤付着
4	ＳＩ２ 床直	弥生土器 壷	13.2 △8.3	口縁部ほぼ完存	外面：口縁部多条平行沈線後ナデ消し、頸部ヨコナデ、肩部以下調整不明 内面：口縁～頸部ヨコナデ、頸部以下ヘラケズリ	密　３㎜の白色砂粒、0.5㎜以下の黒色砂粒・雲母	外面：橙色 内面：橙色	良好	
5	ＳＩ２ 床直	弥生土器 甕	14.2 △4.8	口縁部ほぼ完存	外面：口縁部多条平行沈線後ナデ消し、頸部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ	密　２㎜以下の白色砂粒、0.5㎜以下の黒色砂粒・雲母	外面：橙色 内面：橙色	良好	
6	ＳＩ２ 床直	弥生土器 器台	※10.0 △4.2	脚裾部ほぼ完存	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ、脚端部ヨコナデ	密　２㎜以下の白色砂粒、0.5㎜以下の黒色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	上半に煤付着
7	ＳＩ２ ７層	弥生土器 壷	※15.5 △9.4	口縁部3/4	外面：口縁部多条平行沈線・波状文施文後ナデ消し、頸部ヨコナデ・凹線文、肩部押引状連続刺突文・平行沈線後波状文 内面：口縁～頸部ヨコナデ、頸部以下ヘラケズリ	密　２㎜以下の白色砂粒、1.0㎜以下の黒色砂粒・雲母	外面：褐灰色 内面：灰黄褐色	良好	
8	ＳＩ２ ７層	弥生土器 甕	※21.0 △8.6	口縁部1/4以下	外面：口縁部多条平行沈線、頸部貝殻復縁ナデ後ヨコナデ、肩部平行沈線・波状文 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ケズリ後ナデ、肩部ヘラケズリ	密　２㎜以下の白色・橙褐色砂粒・雲母	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	良好	
9	ＳＩ２ ７層	弥生土器 甕	※16.2 △4.8	口縁部1/4	外面：口縁部15条の多条平行沈線、頸部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ・ヘラミガキ、頸部ケズリ後ヨコナデ	密　１～２㎜の白色・赤褐色砂粒	外面：浅黄橙色 内面：にぶい黄褐色	良好	
10	ＳＩ２ ７層	弥生土器 甕	※19.1 △7.9	1/3	外面：口縁部15条の多条平行沈線後ヨコナデ、頸部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ 内面：口縁部ナデ後ヘラミガキ、胴部ヘラケズリ	密　３㎜以下の白色・灰色砂粒を含む	外面：橙色 内面：橙色	良好	
11	ＳＩ２ ７層	弥生土器 台付壷？	－ △6.0	1/3	外面：胴部波状文後ヘラミガキ、脚台ヨコナデ 内面：胴部・脚台部ヘラケズリ、胴部下端のみナデ	密　２㎜以下の白色砂粒	外面：にぶい黄橙色～橙色 内面：にぶい黄橙色～橙色	良好	内外面煤付着
12	ＳＩ２ ７層	弥生土器 器台	－ △5.0	受部1/4	外面：口縁部多条平行沈線、受部ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	密　１～３㎜の白色砂粒、0.5㎜以下の黒色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	
13	ＳＩ２ ７層	弥生土器 器台	※18.5 △5.0	口縁部1/6	外面：口縁部多条平行沈線・波状文、受部ヘラミガキ後ヨコナデ 内面：ヘラミガキ後上端ヨコナデ	密　２㎜以下の白色・黒色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	外面赤色塗彩 14と同一個体？
14	ＳＩ２ ７層	弥生土器 器台	底径15.4 △14.7	脚部3/4	外面：筒部ヘラミガキ、脚部平行沈線・波状文、ヨコナデ 内面：筒部ヘラケズリ、脚部ヨコナデ	密　２㎜以下の白色・黒色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	外面赤色塗彩
15	ＳＩ２ ７層	弥生土器 低脚坏	－ △4.2	1/4	外面：ナデ 内面：ヘラミガキ	密　３㎜以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	
16	ＳＩ２ ７層	弥生土器 壷	※21.2 △11.2	口縁部3/4	外面：口縁部５条の凹線文、頸部ヨコナデ・８条以上の凹線文 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ナデ	密　３㎜以下の白色砂粒、１㎜以下の黒色砂粒・雲母	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好	
17	ＳＩ２ ７層	弥生土器 甕	※16.1 △7.25	1/4	外面：口縁部２条の凹線文、頸部ヨコナデ・ヘラ状工具連続刺突文、胴部は木口端部によるクシ歯状の連続刺突文施文後ヘラミガキ 内面：ナデ調整後円形刺突文、体部はヘラケズリ	密　２㎜以下の白色砂礫	外面：浅黄褐色～にぶい黄橙色 内面：浅黄褐色	良好	
18	ＳＩ２ ７層	弥生土器 甕	※13.8 △8.2	1/5	外面：口縁部３条の凹線文、頸部ヨコナデ、胴部ハケメ 内面：口縁～頸部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ・指押さえ	密　２㎜以下の白色・灰色砂粒	外面：にぶい黄橙色～灰黄褐色 内面：にぶい黄橙色	良好	
19	ＳＩ２ ７層	弥生土器 甕	※20.6 △7.7	1/4	外面：口縁部４～５条の凹線文、頸部以下ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ナデ・ヘラケズリ	密　２㎜以下の白色砂粒、0.5㎜以下の黒色砂粒	外面：橙色 内面：灰褐色	良好	
20	ＳＩ２ １層	弥生土器 注口	－ △5.2	注口部4/5	外面：ナデ 内面：ナデ	密　２㎜以下の白色砂粒・石英	外面：浅黄橙色 内面：浅黄橙色	良好	外面に煤付着
21	ＳＩ２ １層	土師器 甕	※21.7 △3.7	1/4	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部以下ヘラケズリ	密　１㎜以下の白色砂粒・石英	外面：橙色 内面：橙色	良好	
22	ＳＩ２ １層	須恵器 甕	－ △5.0	胴部1/10以下	外面：平行タタキ 内面：同心円状当具痕	密　0.5～１㎜の石英・白色砂粒	外面：灰色 内面：灰色	堅緻	

表７　ＳＩ２出土石器観察表

遺物No.	出土位置	層位	器種	石材	法量				備考
					長さ（㎝）	幅（㎝）	厚さ（㎝）	重さ（g）	
Ｓ４	ＳＩ２	７層	磨石・敲石	安山岩	17.9	6.0	8.2	1100.0	表面磨面、下面敲打痕
Ｓ５	ＳＩ２	７層	磨石・敲石	安山岩	19.8	6.3	7.3	1370.0	表面磨面、下面敲打痕
Ｓ６	ＳＩ２	埋土	敲石	安山岩	15.2	4.2	6.8	610.0	下面敲打痕
Ｓ７	ＳＩ２	７層	敲石	安山岩	15.2	4.8	7.1	710.0	表面敲打痕
Ｓ８	ＳＩ２	１層	敲石	安山岩	17.5	6.0	7.0	990.0	表面敲打痕
Ｓ９	ＳＩ２	埋土	敲石	安山岩	13.6	7.1	6.6	850.0	上下面敲打痕
Ｓ10	ＳＩ２	７層	磨石・敲石	安山岩	14.9	5.2	△11.7	1080.0	表面磨面、表・側面敲打痕
Ｓ11	ＳＩ２	11層	凹石	安山岩	11.0	3.4	10.3	540.0	表面赤色顔料付着
Ｓ12	ＳＩ２	床直	台石	安山岩	39.4	13.1	28.0	19520.0	上面磨面
Ｓ13	ＳＩ２	７層	台石	安山岩	22.6	8.0	△22.5	5680.0	上面磨面、右側面折損

表８　ＳＩ２出土鉄器観察表

遺物No.	遺構 層位	器種	長さ（㎝）	幅（㎝）	厚さ（㎝）	重さ（g）	形態的特徴	備考
F１	ＳＩ２ 埋土	鉄器片	※3.8	※0.8	※0.5	13.8	棒状鉄器が折り返されたもの、または折損した破片が錆着したものか	

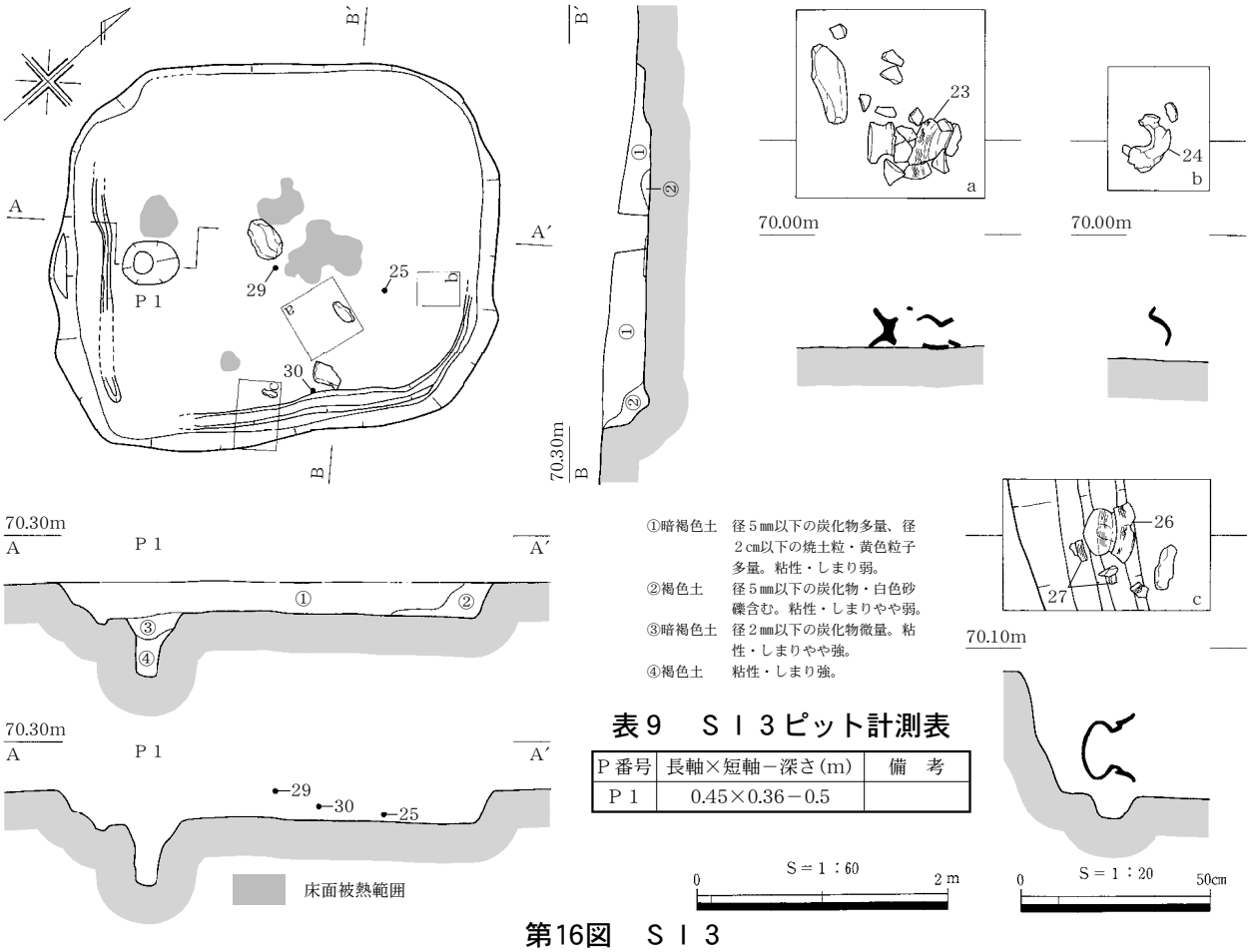


表９　ＳＩ３ピット計測表

Ｐ番号	長軸×短軸－深さ(m)	備　考
Ｐ１	0.45×0.36－0.5	

第16図　ＳＩ３

いたことから、長期間利用されていたものと考えられる。

埋土と遺物の出土状況　埋土の状況は、①層とした暗褐色土が中心部を覆い、壁際に②層とした褐色土が堆積する。①層は、炭化物と焼土粒子を密に含み、遺物も上部から下部にわたって多く包含されていた。図化された土器のなかで、赤色塗彩された台付壺23と巾着形をした小型壺24、台石Ｓ15などは北壁から東壁寄りの床面直上で出土している。また、複合口縁の小型甕26は東壁溝埋土直上に位置することから、これらの遺物は竪穴が廃絶し埋没する過程で、比較的短期間に投棄されたものと思われる。

出土遺物　23は頸部が窄まり、大きく外反する口縁と球状の胴部を有する台付壺である。体部上半には10条の平行沈線と波状文がめぐり、器面はミガキ調整後、赤色塗彩がなされる。内面は口縁部と器台内面がミガキ、体部はヘラケズリ調整である。24は体部下半に最大径を有する巾着形の小型壺である。脚台部は削り出しによって作り出されている。口縁部には４条の平行沈線がめぐり、ミガキ調整が施される。体部はナデ調整である。26は器壁が薄く、焼成が不良な小型の複合口縁甕である。つまみ上げによる幅広の口縁帯には、５条１単位の波状文が２段、体部上半にも同単位の波状文と10条の多条平行沈線文が描出される。器壁の薄さや口縁部の形態等から他の出土土器よりも新しい様相を示す。25・27～30は口縁部に８～11条の平行沈線がめぐる複合口縁甕である。頸部以下はナデ調整、口縁内面は粗いミガキもしくはナデ、頸部以下はヘラケズリ調整が観察される。Ｓ14は右脚部が欠損した無斑晶安山岩製の石鏃である。基部は浅い抉りがみられることから凹基無茎鏃と考えられる。Ｓ15は1/3ほど欠損した安山岩製の台石である。上面には赤色顔料が付着している。